

『[新撰畫引] 萬通字類大全』の資料性をめぐって

今野真二

はじめに

本稿は、明治七（一八七四）年十月に刊行された、青木輔清編輯、荒木蕨園、石村貞一校正『新撰畫引萬通字類大全』（以下では「萬通字類大全」あるいは「本書」と呼ぶ。）¹⁾を採りあげ、日本語学という学の枠組みの中で、同書をどのようなテキストととらえればよいかについて考察することを目的としたい。「どのようなテキストととらえればよいか」には「日本語についてどのような知見が得られるか」ということを含む。

『萬通字類大全』は「凡例」を備えているので、まず「凡例」によって、本書について概観する。『萬通字類大全』の「凡例」には次のようにある。概観に必要な条を示す。振仮名はそれが施されている漢字列の後ろに丸括弧に入れて示した。細字双行は「」に入れて示した。

一 此字書ハ幼童女子ニモ搜索（ミイダ）シ易（ヤス）カラ
ンヲ主旨（ムネ）トシ字彙ノ檢字法ニ倣（ナラ）ヒ偏冠ヲ論
ゼズ只現在ノ總畫ニテ引ク也然レトモ同畫ノ字數十二至ルトキ
ハ尚ホ搜索（ミイダシ）ノ繁冗（メンダウ）ナルヲ以テ總テ字

体ヲ偏アルト偏ナキトノ二類ニ區分シ偏ナキ分ヲ首(ハジメ)ニ出シ偏アル字ヲ□ノ内ニ納ム「尚ホ一層速ニ字ヲ求メントセバ同画中ニテモイ偏ハミ偏ヨリ首ニアル等ニ注意スベシ」

一 本文大字ノ下ノ細字ハ㊦苗字(メウジ) 人名㊧地名㊨雜記(ザツキ)ノ三部ニ區別シ人名地名ハ内外ヲ論ゼズ只童蒙ノ讀ミ難キモノヲ輯(アツ)メ日本外史翻譯書等ヲ讀ノ便ニ供(ソナ)ヘ雜記ニハ方今專用(センヨウ)ノ漢語(カンゴ)、熟語、其外單語篇等ニアル語ヲ抜抄(ヌキダ)シ御布告書類ヲ讀ミ且作文翻譯等ノ便ニ供フ但シ其意ノ通シ難キモノハ左傍(ヒダリ)ニ訓釋(コトワケ)ヲ施(ホドコ)ス尤皆大略(オヨソ)也

一 通例名諱(ナノリ)ニ用フル字ハ左肩(ヒダリノカタ)ニ△十、○□等五性ノ合紋(アヒジルシ)ヲ以テ之ヲ區別シ其訓假名(ヨミガナ)ノ頭ニハ▲ノ符(シルシ)ヲ用フ

一 此書ハ専ラ通俗ヲ主トスルガ故ニ音訓ノ假字モ亦通俗ニ随フモノ尠シトセズ尚ホ或ハ遺漏誤填多カラシ看者之ヲ訂サバ幸甚

「幼童女子」をひきあいに出し「通俗ヲ主トスル」と謳うことは常套的な謙辞とみるべきであろう。しかし、「名諱ニ用フル字」に符号を附し、名乗りに使う訓の頭に「▲ノ符」を附すことは一定の手間を要し、かつ版面にもそれがあらわれることを考え併せると、そうしたことがらを含んだ使用が見込まれていたと推測することができるといえる。

山田忠雄(一九八二)は右の第一条を「此の書の独創」(五十一頁)と評価し、第二条について「是より先、四年春刊の205日誌画引新令字類にも見られるが、彼は熟語そのものに徹するに對し、此は固有名詞に對する顧慮が頗る大である」(同前)と述べた上で、「四声・韻字に對する用意を全く欠如すること」も上記の創意と相俟って特徴とすべきである(同前)と述べる。

松井利彦(一九九〇)は、『萬通字類大全』の「雜記」に収められている漢語が『大全漢語解』を承けて成立していると断定してよい(二一九頁)と述べた上で、『大全漢語解』以外から採集された(と思われる)漢語の中には「音韻授幼文選字引」(外題・柱題などは「文選字引」、享保一九年原刻・文久二年一〇刻成)から集められたと推定される語(同前)があると述べ、「古い漢語がそうとうに掲載されているということになる」(同前)と述べる。

松井利彦（一九九〇）の指摘どおりであれば、『萬通字類大全』は、見出しとしている單漢字については、山田忠雄（一九八二）が指摘するように、「四声・韻字に対する用意を全く欠如」している一方で、『文選』の名を冠する『音韻授幼文選字引』から「雜記」部分に漢語をとりこんでいることになる。ただし、そうしたことはあり得ることと考えるので、松井利彦（一九九〇）の指摘に疑義をもっているのではない²。

そうではなく、一見相反するような、松井利彦（一九九〇）の指摘と、山田忠雄（一九八二）の指摘は、『文選字引（江戸）』を明治七年に刊行されている『萬通字類大全』の前に置き、（場合によっては）『新編廣集字書大全』（明治四年刊）、『日誌畫引』新令字類（明治四年刊）、『新刻詩韻大成』（明治五年刊）を前に置き、それらを含めた「共時的な言語態」の中でそれぞれのテキストを観察し評価することによって、それぞれのテキストの「資料性」を確認することができるという、いわば最終的な、大きな課題があることを思わせるということをここで指摘しておきたい³。

本稿においては、そうした最終的な、大きな課題を一方に置きながら、まずは『萬通字類大全』の資料性について概観することを目的とする。図として、『萬通字類大全』の一一九丁表

を示す。図でわかるように、『萬通字類大全』は單漢字を見出しとして、語釈中に幾つかの和訓を示し、場合によっては見出しとなつてゐる漢字を含む「苗字人名」「地名」をあげ、「雜記」として見出しとなつてゐる漢字を含む漢語を示す。山田忠雄（一九八二）も松井利彦（一九九〇）も、「雜記」に掲げられている漢語に着目した考察を展開している。その一方で、松井利彦（一九九七）は附録している「近代漢語辭書一覽」に「萬



通字類大全」を載せない。また、山田忠雄（一九八二）も「第一・二部附表」において『萬通字類大全』を「玉篇類」に入れている。つまり松井利彦（一九九七）、山田忠雄（一九八二）は『萬通字類大全』を漢語辞書とみていない。そのことからすれば、『萬通字類大全』の資料性を窺うためには、まずは見出しとなっている単漢字とその単漢字に配されている和訓について検討する必要があることになる。しかし、その検討はこれまで行なわれてきていない。そうしたことをふまえて、本稿においては見出しとなっている単漢字と和訓について観察、分析を行なうことにしたい。

一 見出しとなっている漢字について

四十三丁表一行目から五十七丁裏の一行目まで画數十画の漢字が見出しとなっている。丁数は十五丁、漢字の総数は七二四字である。附録を除いた『萬通字類大全』の丁数は二〇九丁であるので、丁数でみると全体の七パーセントほどにあたるが、本稿ではひとまずこの範囲を観察対象とする。

「X 二同シ・X 二同」という形式で、見出しとなっている漢字についての注記が加えられている字が六十六字ある。こうし

たことのわりあいを測定することに積極的な意義はないと考えるが、七二四字に対してのわりあいは九パーセント程度にあたる。

一・一 動用字について

「峯」に対して「峰二同シ」（四十四丁表二行一字目）、「胸＋月」に対して「胸二同シ」（四十六丁表六行五字目）・「胸」に対して「胸＋月」二同シ」（五十五丁裏一行三字目）、「脇」に対して「脅二同シ」（五十五丁裏三行四字目）、「蚊」に対して「文＋虫」二同シ¹、「虫×天」に対して「蚤二同シ」（五十六丁表二行一字目）、「虻」に対して「亡＋虫」二同シ」（五十六丁表三行二字目）という注記がみられる。これらは、漢字を構成する要素（パーツ）が等しく、その配置が異なる「動用字」にあたる。漢字を構成する要素が等しいので、「胸」と「胸＋月」とは総画数が等しい。したがって、比較的ちかい位置に「動用字」が見出しとして存在することになる。それにもかかわらず、「胸」と「胸＋月」とをとともに見出しにしていることは、丁寧に見出しをたてているといつてよい。ただし、見出し「文＋虫」（四十七丁表五行二字目）、「亡＋虫」（四十七丁表五行三字目）には「蚊」「虫×天」と「同シ」という注記がなく、

注記が徹底しないこともある。ちなみにいえば「峯・峰」「(匈・月)・胸」「脇・脅」「蚊・(文・虫・天)」「(虫×天)・蚕」はいずれも『康熙字典』に載せられている。

一・二 『文選字引』とのかかわり

四十四丁裏五行四字目には見出し「晁」に対して「朝二同シ」という注記がみられる。「晁」と「朝」は「動用字」ではない。『文選』に収められている司馬長卿(司馬相如)の「上林賦」に「赤瑕駁犖、雜宙其間。晁采A B、和氏出焉」(Aは「(王×宛)」、Bは「(王×炎)」(赤瑕駁犖として、其の間に雜宙す。晁采A B、和氏出でたり)というくだりがあり、当該箇所「司馬彪曰晁采玉名善曰晁古朝字」という注がみられる。李善は「晁」字が古の「朝」字であると述べており、『萬通字類大全』の「晁」字に対しての「朝二同シ」という注記はこうした記事と重なり合う。

『萬通字類大全』が『文選字引』を何らかのかたちで参照しているとするれば、こうした記事は江戸期に出版された『文選字引』にあつて、それがいわば「流れこんでいる」ことが予想され、そうした通時的な観点から事象をとらえなくなる。しかし、刊記の最後に「文久二年壬戌歳」とある『文選字引』を検する

と、「晁」を見出しにはしているが、そこには「アキラカ」(五十一丁裏一行三字目)とあるのみで、「朝」字との関係は記されていない。この『文選字引』は漢語をあげるにあたっては、**四**で「呉都賦」、**魏**で「魏都賦」、**蜀**で「蜀都賦」「二西都」で「西都賦」のように、当該漢語の「出所」を示しているが、「晁」には漢語があげられていない。天保十一年刊の『文選字引』も同様である。

ところが、『萬通字類大全』刊行後に刊行されている風月莊左衛門編輯、字喜多小十郎増字校正『増字文選字引』(明治九年十二月刻成発兌)においては、「晁」字に「アキラカ／同朝」(三十一丁裏六行一字目)とあり、山崎美成編纂『(四書五経)増補文選字引』(明治九年八月十七日銅版再版届)においても「晁」字に「アキラカ／同朝」(三十四丁表七行一字目)とある。あるいはまた、『萬通字類大全』にさきだつ、明治四年に刊行されている『日誌畫引新令字類』にも「晁」字に対して「アキラカ／同朝」(五十七丁裏十行一字目)とある。

『日誌畫引新令字類』『増字文選字引』『(四書五経)増補文選字引』の版面はちかく、「晁」字に関しては、ということになるが、ほぼ同一であるといつてよい。『萬通字類大全』の版面はこれらとは異なるが、「晁」字に「朝」字との関係を示す点

においては共通している。こうしたことから、次に掲げるような「課題」が明らかになったと考える。

1 江戸期に刊行された『文選字引』と明治期に刊行された『文選字引』とを対照して、何が継承され、何が継承されていないかを具体的にあらかにする。具体的な例でいえば、前者にはなかった「晁」字に対しての注記「同朝」がどのようなところから後者へもちこまれたか、というようなことである。

2 『日誌書引新令字類』『増字文選字引』『(四書五経) 増補文選字引』『萬通字類大全』など、従来はあまり分析が行なわれていない、漢語辞書とは体例が異なるテキストをひとまづは共時的にとらえて、対照、分析を行なうことによって、当該時期の辞書体資料の生成プロセスを窺う。

一・三 康熙字典体・康熙字典俗体

中国の康熙五十五(一七一六)年に康熙帝の命によって『康熙字典』が成った。『康熙字典』に掲げられている字のかたちを「康熙字典体」と呼ぶ。「戀」「恋」字を例とすれば、「戀」「恋」いずれも『康熙字典』に載せられているので、いずれも「康

熙字典体」ということになる。しかしながら、「戀」にはさまざまな文献の情報が載せられているが、「恋」には「字彙」の「恋俗戀字」が引かれているだけである。本稿では、「恋」のように、『康熙字典』に載せられているけれども、「俗字」であることの情報だけが載せられているような字を「康熙字典俗体」と仮に呼び、「戀」を「康熙字典体」と呼ぶことにして、両者を区別することにした。

『萬通字類大全』は四十四丁表五行一字目に「恋」を見出しとして、「戀二同シ」と注記している。「戀」も二〇〇丁表四行一字目において見出しとなっているが、そこには「恋二同シ」とは注記されていない。その点においては、徹底していないが、「康熙字典俗体」も「康熙字典体」とともに見出しにしていることには注目しておきたい。四十五丁裏六行四字目には見出し「眞」があるが、そこには何も注記がなく、四十六丁表一行二字目に「眞」(より具体的には八画目以降が「大」の形になった字であるが、今ここでは「眞」とみなすことにする)が見出しとなっており、そこには「眞二同シ」と注記されている。この「恋」「眞」は「康熙字典体」には注記がなく、「康熙字典俗体」に注記がある場合であるが、一九三丁表三行五字目においては「康熙字典体」である「戀」が見出しとなり、「康熙字典

俗体」である「継二同」という注記が施されている。「康熙字典体見出し＋康熙字典俗体注記」「康熙字典俗体見出し＋康熙字典体注記」いずれの場合もあることがわかる。後者にあたる例を十例あげておく。

「康熙字典俗体見出し＋康熙字典体注記」

1 蓋

蓋二全シ

九十八丁表二行二字目

2 大漢和辞典5803番の字

夢二全

一一四丁表六行一字目

3 大漢和辞典13584番の字

斷二全

一二三丁表六行一字目

4 馬×戸

驢二全

一三二丁裏二行三字目

5 大漢和辞典38938番の字

逃二全シ

八十二丁表一行五字目

6 腸

腸二全

一四五丁裏二行三字目

7 娟の口がムになっている字

娟二全シ

三十七丁表六行二字目

8 帽の口がムになっている字

帽二全シ

三十八丁表二行二字目

9 松のムが口になっている字

松二全シ

三十九丁表五行六字目

10 四点・烽

烽二全シ

五十九丁裏五行四字目

2においては、『萬通字類大全』は『大漢和辞典』が5803番を与えている字（夢）の草冠が「育」の月を除いた部分（エ＋ム）に変わった字（夢）を見出しにしている。この字は『康熙字典』に載せられており、「俗夢字」と説明されている。3において見出しになっているかたちは「斷」左側の横棒の下が儿になっている字で、『康熙字典』は『篇海』の「俗斷字」という記事を掲げている。10においては、『萬通字類大全』は『大漢和辞典』が19060番を与えている字（烽の火偏が四点に変わって下部にまわっている「四点・烽」）次のような見出しもある。

11 彈の口がムになっている字

彈二全

一〇三丁表一行一字目

21	政	八画政	
20	眞のヒが上になっている字	眞ニ全シ 八十二丁表五行一字目	
19	大漢和辞典 41274 番の字	関ニ全シ 八十一丁裏四行一字目	
18	窗 (ただしタの三画目はつきぬけている)	窓ニ全シ 七十八丁表四行六字目	
17	晉のムが口になっている字	晉ニ全シ 七十七丁表一行三字目	
16	δ	曾ニ全 七十七丁表一行四字目	
15	総	總ニ全 一二七丁裏三行四字目	25 尔・参 参ニ全シ 六十三丁表四行一字目
14	練	練ニ全 一二七丁裏三行三字目	24 一本・通 遞ニ全シ 六十二丁表四行四字目
13	ウ+自+水	寡ニ全 一一四丁裏二行三字目	23 盗 盜ニ全シ 六十丁裏一行一字目
12	郷	郷ニ全 一一一丁裏六行三字目	22 二点凡・恐 無点凡・恐 五十九丁表六行七字目 四十二丁裏四行五字目

11において『萬通字類大全』が見出しにしているかたちは『康熙字典』には載せられていない。このかたちは、褚遂良や虞世南の楷書のさがけとなったと目されている、隋の孟顓達碑（六〇〇年建立、一九一〇年発見）、唐の欧陽詢の皇甫誕碑（唐代建立）にみられる。12において見出しになっているかたち「郷」（Unicode 9115）は、『大漢和辞典』補巻が「補六一八」の番号を与えて、「郷」のまんなが「𡩇」になっているかたち（『大漢和辞典』が39571の番号を与え、『康熙字典』が載せているかたち）の「俗字」と説明しているかたちにあたる。ちなみにいえば、平成二十二（二〇一〇）年十一月三十日に内閣告

示された「常用漢字表」には「郷」(Unicode 90F7)が載せられており、『康熙字典』が載せているかたちにはUnicodeが与えられていない。12においては見出しになっているかたちも、注記されているかたちも、ともに『康熙字典』が載せていないことになり、「非康熙字典的」ととらえることができる。13において見出しとなっているかたち「ウ+自+水」は『康熙字典』に載せられていないし、『大漢和辞典』にも載せられていない。また、「中国においては、殷・周の甲骨・金文から清の書まで、日本においては、飛鳥から平安時代に至る名跡」(約一五〇〇点)を「採録対象」としていることを「凡例」で謳う『大書源』(二〇〇七年、二玄社)もこのかたちそのもの、このかたちにつながりそうなかたち、いずれも載せていない。観智院本『類聚名義抄』は「ウ+一+自+分」にちいかたちを法下二十四丁表七行「一字目」に掲げ、その下に「俗」字三字を並べるが、この中にも「ウ+自+水」はみられない。ウ冠に続くかたちは、「一+自」あるいは「自」や「直」にちかく認識される可能性はあり、下部のかたちも「分」や「水」に認識される可能性はある。そう考えると、行書体、草書体で実現していたパーツを楷書にちいかたちにするにあたって、13において見出しになっている「ウ+自+水」のようなかたちがいわば「再構築」

されたという可能性を考えておくべきであろうか。14「練」、15「総」は『康熙字典』に載せられていない。

「曾」を「一画目二画目でつくるかたち」(以下、上部のかたち)「三〜八画目でつくるかたち」(以下、中央部のかたち)「日」(下部のかたち)と三つのパーツに分けてみる。「上部のかたち」は「八」のようなかたちと「ソ」のようなかたちの二つがある。

「中央部のかたち」は「田」と「曾」の中央部のようなかたちの二つが少なくともある。これらを組み合わせると次のように四つのかたちができる。このうちで16において見出しになっているのはδのかたちで、その見出しに対して「曾二同シ」と注記が施されている。

a	八+田+日
γ	八+曾中央部+日 曾 Unicode 66FE 『康熙字典』見出し
β	ソ+田+日 曾 Unicode 66FD 『康熙字典』不掲載
δ	ソ+曾中央部+日

17において『萬通字類大全』が見出しにしているかたちは『康熙字典』には載せられていない。Unicodeは「窓」(7A93)「窗」(7A97)「窻」(7ABB)三字に与えられている。これら

の中で、『康熙字典』が見出しにしているのは「窗」で「窓」「窓」はいずれも載せられてはいるが、「俗」とみなされている。18 において『萬通字類』が見出しにしているかたちは「窗」の「タ」の三画目が一画目をつきぬくかたちであるが、このかたちは『康熙字典』に載せられていない。19 において見出しにしているかたち、注記にみられる「関」はいずれも『康熙字典』が「俗」とみているかたちにあたる。21 においては、見出しに「政」を掲げ、「政」の四画目と五画目とがつながったような「(八画政)ニ全シ」という注記を施している。この「八画政」は手書きにおいては、ひろくみられるかたちであり、「政」に対して、わざわざこの「八画政」と同じであることを注記することの必要性がどれほどあっただろうか。

「常用漢字表」に載せられ、現在使われている「恐」(Unicode 9980・大漢和番号 10552)は『康熙字典』には載せられていない。『康熙字典』は上部右側の「凡」が「虱のノ虫がナに変わったかたち」(ナ凡)を掲げている。22 において、『萬通字類大全』が見出しにしているかたちは、「恐」の「凡」の点が二つあるような「二点凡・恐」で、注記において示しているかたちは、「凡」の点がない、「無点凡・恐」である。「二点凡・恐」も「無点凡・恐」も『康熙字典』は掲げていない。

23 において『萬通字類大全』が見出しにしている「盜」は『康熙字典』には載せられていない。『康熙字典』は「盜」を載せている。24 において『萬通字類大全』が見出しにしているかたちは、「通」の旁りの横棒が二本ではなく一本の「一本・通」であるが、このかたちは『康熙字典』に載せられていない。25 において『萬通字類大全』が見出しにしているかたちは、「參」の七画目以降が「余」に変わった「余・參」であるが、このかたちは『康熙字典』に載せられていない。

1 から 10 までの例は、「康熙字典俗体」を見出しにしており、また 11 から 25 までの例は、見出し、もしくは注記、あるいは見出し・注記双方が『康熙字典』に載せられていないかたちであった。このことからすれば、『萬通字類大全』は『康熙字典』とは重なり合わない漢字のかたちを少なからずとりこんでいることになる。こうした「ありかた」を今仮に「非『康熙字典』的なありかた」と呼ぶことにすれば、『萬通字類大全』が出版された明治七年の時点で、そうした「ありかた」を反映させている辞書が出版されていたことには注目しておきたい。

一・四 和訓について

例えば、「苡」(二十三丁裏四行一字目)には「フシタマ」「ヲ

パコ」二つの和訓が配されている。漢語「フイ(苺苳)」はオオバコのことであり、『かたこと』には「車前草(おほばこ)をばこ」とある。『日葡辞書』も「Vobaco」を見出しにし、見出し「Xajenzi」の語釈中にも「Vobaconomi」「Vobaco」と「オバコ」が使われている。⁽⁵⁾「フシタマ」についていえば、まず『日本国語大辞典』は「フシタマ」を見出しにしていない。ところで、「ヨクイ(薏苳)」はハトムギのことであり、「シジン(苡仁)」「シベイ(苡米)」はジュズダマの実のことである。そうしたことを考え併せると、ジュズダマのようなものが「フシタマ」である可能性がある。

「旨」(三十三丁表五行三字目)には「タマ」「ホリアナ」二つの和訓が配されているが、『日本国語大辞典』は「ホリアナ」を見出しにしていない。『大漢和辞典』は「旨」の字義を「小さいおとしあな」と説明しているので、「ホリアナ」は「掘った穴」という語義の語と思われる。

「王×斤」(二十八丁裏四行二字目)には「ヌルダマ」という和訓が配されている。この場合は見出しとなっている漢字「王×斤」が『康熙字典』はもとより『大漢和辞典』にも載せられていない。『新令字類』『新編廣集字書大全』もこの字を載せていない。また『日本国語大辞典』は「ヌルダマ」を見出しにし

ていない。『萬通字類大全』は見出し「王×文」(二十八丁裏五行一字目)に「タマ」「アカダマ」「王×比」(同二字目)に「トガ」「キズダマ」という和訓を配している。『日本国語大辞典』は「アカダマ」「キズダマ」を見出しにしている。ただし、後者については、「不祥事を起こして評判を落とした遊女」と(限定的な語義の)説明をしている。『大漢和辞典』は「王×比」の字義を「珠の名。淮水に産し、よい音を發する」と説明しており、「トガ」「キズダマ」に相当する字義はみあたらない。そのことからすれば、「王×比」に「トガ」「キズダマ」という和訓を配していること自体についても、なんらかの過誤の可能性を考える必要があるいはあるか。そうであったとしても、「キズダマ」は「傷のある珠」という語義の語であるとみるのが自然であろう。その語義が『日本国語大辞典』の見出し「きずだま」には記されていない。

「樺」(一〇五丁表一行五字)には「クイ」「スキガシラ」という和訓が配されている。『日本国語大辞典』は「スキガシラ」を見出しにしていない。『和名類聚抄』に「犂」が見出しになっている。「犂」の「和名」は「加良須岐」(カラスキ)で、条下に「朶(木×袁)」「(實際は「袁」が「表」のようなかたちになった字)」が掲げられ、「等利久比」(トリクビ)が配されている。

『日本国語大辞典』は見出し「とりくび」を「唐鋤（からすき）の部分の名。車の轅（ながえ）のように前にさし出した部分。ねり」と説明している。フラミンゴのように首の長い鳥を思い浮かべたとすると、嘴の部分が土を掘り起こす犂先で、長い首の部分がねり木つまり「トリクビ」にあたることになる。『大漢和辞典』は「樨」の字義を「からすき」「からすきのとりくび」と説明している。「すきがしら」は「とりくび」ではなく、むしろ土を掘り起こす犂先にふさわしい語かもしれない。そうであるとする、「からすきのとりくび」＝「すきがしら」ではないことになるが、いずれにしても、犂の部分の名称である可能性がたかい。農具や農具の部分の名称、異称は「はなしことば」では使われていても、文字によって記録される機会が少な可能性がたかい。

「藁」（七十九丁表四行三字目）に「ミドリ」「トビノアシグサ」という和訓が配されている。『大漢和辞典』はこの「藁」の字義を「かりやす。草の名。莖葉を黄色の染料とする。こぶなぐさ。緑（以下略）」と説明している。『日本国語大辞典』は「かりやす」を「イネ科の多年草。各地の山野に群生するが、古来染料植物として栽培もされた。ススキに似てやや小形。高さ一メートル内外。葉は互生し、長さ二〇～四〇センチメートルの

広線形でやや薄く、下部は鞘（さや）状に茎を包む。夏から秋に茎頂から三～六本に枝分かれた花穂（かすい）を出し、枝穂の各節に二個ずつの小穂をつける。小穂には芒（のぎ）がない。秋に刈り取って、その煎（せん）じ汁を黄色の染料に利用する。滋賀県伊吹山の産が有名で、近江刈安（おうみかりやす）の名もある。刈安は刈り易い意からきたという。かりやすぐさ。やまかりやす。学名は *Miscanthus tinctorius*」と説明している。カリヤスの小穂はトビあるいはニワトリの足のような形をしており、「トビノアシグサ」はそうした形状の小穂を出すカリヤスの別名であることは疑いないだろう。

『大漢和辞典』は「藁＝草冠＋分＋木」（七十七丁表三行五字目）を「木×（山＋分）」と同じと説明している。『説文解字』は「木×（山＋分）」（大漢和番号14868）の字義を「香木」と説明している。この説明と『萬通字類大全』が「藁＝草冠＋分＋木」に配している和訓「カホリギ」とは一致している。『日本国語大辞典』は見出し「かおりぎ」を「香木、沈香（じんこう）の異名」と説明し、使用例として『書言字考節用集（1717）』六「沈香 カヲリギ 本名沈水香」を挙げているが、「カホリギ」を和訓とする単漢字が存在していたことがわかる。

「食＋束」（一四九丁表五行一字目）に和訓「コナガキ」が配

されている。『大漢和辞典』は「餗」を見出しとし、字義を「かなへの盛り物」「かゆ」「八つの珍味のそなへもの」「たべもの」「こながき。米をあつものに和したもの」と説明をしている。この説明文中に「こながき」が使われている。しかし、『日本国語大辞典』は「こながき」を見出しにしていない。

「王×鳥」(一四九丁裏五行四字目)には「オホガモ」という和訓が配されている。『大漢和辞典』は「王×鳥」(大漢和番号46718)の字義を「(蜀×鳥)(王×鳥)は、鴨に似た鳥。或は(王×佳)に旁、通じて玉に作る」と説明している。『日本国語大辞典』は「おおがも」を見出しにしていない。

おわりに

本稿では、明治七年に刊行された『萬通字類大全』について、これまでほとんど吟味されたことのない、単漢字部分の「情報」に注目して、その資料性について概観することを試みた。その結果、見出しとして掲げている漢字のかたちの中には「康熙字典典体」に一致しないものが一定数含まれていることがわかった。また見出しに対しての「Xニ同シ」という注記のXに「康熙字典典体」に一致しないものを少なからず見出すことができること

がわかった。「康熙字典典体」は印刷用の字体として、日本の漢字に一定の影響を与えていることがわかってはいるが、『萬通字類大全』は、「康熙字典典体」に限定されない「漢字のかたちについての価値観」が存在していることを示唆していると考ええる。また、本稿では、見出しになっている漢字に配されている和訓についても採りあげた。文献によってたやすくは確認できない語や語形を『萬通字類大全』が載せているという意味合いで、『日本国語大辞典』が見出しにしているか、語義記述があるか、ということも「スケール」にしたかたちで述べた。

『萬通字類大全』のような、単漢字を見出しにしながら、漢語も掲げている、複合的な辞書体資料については、(分析者側の都合によって)積極的に検討されてこなかったといえよう。本稿で扱うことができなかった漢語の吟味については機会を改めたい。江戸期に刊行されている『文選字引』、明治期に刊行されている『新令字類』を視野に入れながらの総合的な分析は今後の課題としたい。

註

(1) 具体的には稿者が所持している二本を使用した。二本のうちの一本は、

表表紙及び表表紙見返しを欠き、「凡例」から始まる。「凡例」の下部に「惣郷文庫」の蔵書印が添えられている。「本文」は二二五丁表まで。もう一本は表表紙、表表紙見返しを備えており、「本文」の刷が佳良であるが「本文」が二二四丁裏で終わっており、二二五丁表「附テ云フ」古人ノ書中ヨリ抄出スルノミ／名乗略解終を欠く。これらは山田忠雄（一九八二）が「第一・二部 附表」の「玉篇類」において「玉210a」という「Na」を与えているものにあたる。山田忠雄（一九八二）の「第一・二部附表」には「増訂再版」を角書きとする「玉210b」「玉210c」が載せられている。「玉210b」は「西野古海校閲并跋、中郎正直題辭、青木輔清緒言、凡例六則、檢字須知、附録名乗用字合性表、木郎普三刻」とあって、「a」と別版（山田忠雄・一九八一・一四七三「備考」）とされているもの。附表の「刊行年月」には「八・九」とあるので、明治八年九月刊行とみなされている。また、附表の「刊行者」には「同盟舎（博文社・江嶋喜兵衛、東生龜次郎）」、「編者」には「青木輔清編輯」と記されている。稿者所持の一本では、テキスト冒頭には中郎正直の「題辭」が置かれ、それに、青木輔清の「再版萬通字類緒言」、「凡例六則」「檢字須知」が続き、「本文」が二二四丁表で終わった後の二二四丁裏には「元版明治七年九月刻成／増訂再版同八年九月刻成／青木輔清編輯／西野古海校閲」とあり、それに続いて「萬通字類大全附録／名乗用字合性表」が置かれ、西野古海の跋文が続くので、これが山田忠雄（一九八一）の「玉210b」にあたると思われる。この本は山田忠雄（一九八二）の附表には記されていないが、刊記に「官許（明治八年／四月八日）同盟舎蔵版」とあり、その前の丁、すなわちテキスト最末尾に「東京第一大區十三小區／濱町二丁目壹番地寄留／編輯／出版人」青木輔清とある。稿者所持のもう一本は、刊記に「東京同盟舎蔵版」とあり、「賣捌書肆」として石川治兵衛、柳川梅次郎、九家善七、東生龜治郎、江嶋喜兵衛、

五名の名が並べられている。これが山田忠雄（一九八二）いうところの「玉210c」にあたると思われる。附表の「備考」欄には五名連記であることの他は210「b」に同じと記されているが、テキスト最末尾には「版權免許同明治九年一月廿九日／編輯／出版人」青木輔清／第一大區十三小區／濱町二丁目一番地と記されており、稿者所持の本のこの部分は「玉210b」と異なっている。また、二二四丁裏も、「元版明治七年九月刻成／増訂再版同八年九月刻成／版權免許同九年一月廿九日青木輔清編輯／西野古海校閲」と記されており、「玉210b」とは異なる。稿者は、「玉210c」の「賣捌書肆」が藤井孫兵衛、杉本甚助、吉岡平助、北畠茂兵衛、稲田佐兵衛、山中市兵衛、内田彌兵衛となっている一本も所持しているので、「玉210c」にちかい、いうならば「玉210d」も存在していることがわかる。

(2) 「文選字引」には「異本が多い」（松井利彦（一九九〇）…一三二頁）ので、以下では「文選字引」を総称として使い、江戸期に刊行されたものの総称は「文選字引（江戸）」、明治期に刊行されたものの総称は「文選字引（明治）」とする。

(3) 辞書を対象とした日本語学の研究においては、「文選字引（江戸）」『新編廣集字書大全』（明治四年刊）『日誌書引』新令字類（明治四年刊）、『新刻詩韻大成』（明治五年刊）『萬通字類大全』（明治七年刊）と時間軸に沿ってならば、テキスト同士の承襲的聯繫を探り、それぞれのテキストがどのように承継されているかを通時的に觀察することはいわば「常道」といってよい。松井利彦（一九九〇）における『大全漢語解』と『萬通字類大全』との対照もそのような「常道」に従ってなされている。そのことに否やはないが、辞書Xと辞書Yとを、何らかの観点で対照し、XとYとが百パーセント重なるのであれば、そもそもどちらかの辞書が（その観点に関しては、ということではあるが）

(4)

分析においては有効であると考ええる。

本稿においては、漢字字形、漢字字体にかかわる情報を電子的に安定したかたちでやりとりすることを考慮し、電子的に情報交換がしにくい字については、漢字の構成要素を使って、「 $a + \beta$ 」「 $a \times \beta$ 」と表示することがある。前者は漢字の構成要素 a 、 β が上下に並んでいる字、後者はそれが左右に並んでいる字をあらわす。こうした形式によっても表示しにくい場合は、 γ の篇を足篇に換えた字というような「説明」によって字をあらわすこともある。素材としての文字は視覚的な存在¹¹かたちであるが、文字を議論するためには、話題としている文字の「かたち」を観察者がどう捉えているかという「認識」を示す必要がある¹²と考える。

(5)

『邦訳日葡辞書』は見出し「[obaco]」の「訳者注」に「天正十八年本・易林本節用集に車前草にヲ、バコまたは、オホバコの訓をつけているが、饅頭屋本節用集には車前草ヲバコとあり、また、別条YobacoにはYobacoの形が二例見える。従って、長音形でない形も行なわれたのである」(六九六頁左)とある。「長音形でない形も行なわれたのである」(傍点筆者)と述べていることからすれば、この施注者は、「長音形の形」が主として行なわれており、「長音形でない形」も行なわれたとみていることになる。そうであれば、『日葡辞書』が主として行なわれていた長音形を見出しにしない理由について述べる必要があるのではないか。『かたこと』が「長音形でない形」を採りあげていることからすれば、「オバコ」が「かたこと」であったとみることは妥当であろう。しかし、『日葡辞書』が「オバコ」ではなく漢方薬としての「シャゼンシ(車前子)」「(＝オバコの種子)」を見出しにしていることからすれば、「シャゼンシ・シャゼンソウ」に対しての「かたこと」が「オバコ」であったという可能性も考えておく必要があるのではないか。

参考文献

松井利彦

一九九〇 『近代漢語辞書の成立と展開』(笠間書院)

一九九七

近代漢語辞書の基準(京都府立大学学術報告人文・社会)第四十九巻)

山田忠雄

一九八一 『近代国語辞書の歩み 上・下』(三省堂)